

聖書：使徒 8：1～13

説教題：散らされた人たちは

日時：2013年9月29日

7章でステパノは新約の教会最初の殉教者となりました。彼は石打ちにされる中で、自分に向かって石を投げる人たちのためにとりなしの祈りをしました。それはあの十字架上のイエス様を彷彿とさせる姿でした。そして彼は眠りにつきました。しかしこれで事は収まりません。「その日、エルサレムの教会に対する激しい迫害が起こった」と8章1節にあります。ユダヤ人たちはステパノの話を通して、イエスの弟子たちの教えは自分たちの立場と根本的に対立していることに気付きました。彼らにしてみれば、キリスト教は従来の神殿制度やモーセ律法を否定する危険な新興宗教に見えたのであり、このまま放っておいたら自分たちの信仰がひっくり返されるかもしれないと脅威に感じたのです。そこでステパノをつぶしたその日から、即刻キリスト教に対する撲滅運動を始めたのです。

この迫害の急先鋒となったのはサウロでした。後にパウロとなって福音のために大きな働きをするあの彼です。このサウロは7章58節で、ステパノが死刑にされる時に着物の番をしていました。また8章1節にステパノを殺すことに賛成していた、とあります。彼は先頭を切つてこの活動に乗り出します。3節：「サウロは教会を荒らし、家々に入って、男も女も引きずり出し、次々に牢に入れた。」「荒らす」という言葉は、野獣が獲物を食いちぎる時に使われる言葉です。彼は信者の家に入り込み、力づくで彼らを引きずり出しては牢屋にぶち込んでいました。男も女も、容赦なくこのことをしたのです。22章4節：「私はこの道を迫害し、男も女も縛って牢に投げ、死にまでも至らせたのです。」26章10節：「祭司長たちから権限を授けられた私は、多くの聖徒たちを牢に入れ、彼らが殺されるときには、それに賛成の票を投じました。」

これはエルサレム教会にとって何という悪夢のような日々だったのでしょうか。この非常事態により、信者たちはみな周辺の諸地域へ散らされて行きます。中には最近信者になったばかりの人たちもいたことでしょう。やっと本当の人生の希望を見出したと喜んでいたところ、一転して今度はいのちを狙われる立場に追い込まれた。モタモタしている暇はありません。早くしないとサウロ軍団の追っ手が自分の家にも伸びて来ます。彼らは住み慣れた生活環境、自分の財産などを捨て置いたまま、急いでエルサレムから遠い所へと逃げて行かなければならなくなつたのです。

そんな中、エルサレムに残る人たちもいました。1節にあるように、それは使徒たちです。彼らはいくら自分たちの命が危険にさらされても、新しく生み出された新約の教会を見捨てるわけにはいかないと考えたのでしょう。2節に「敬けん人たちはステパノを葬り、彼のために非常に悲しんだ。」とあります。一般のユダヤ人の中にも、このようにステパノに好意的な人たちもいました。そのような人々に福音を伝え、教え導くためにも、その地にとどまって、エルサレム教会を死守することが自分たちの義務と考えたのでしょう。

こうしてサンヘドリンにおけるステパノの弁明また説教は、結果的に何も良いことを生み出

さなかつたように見えました。むしろそれは裏目に出てしまい、一瞬の内にエルサレム教会はすべてを失ったような最悪の状況になってしまったのです。しかし、驚くべきは4節です。「他方、散らされた人たちは、みことばを宣べながら、巡り歩いた。」 彼らはキリストへの信仰のゆえに迫害されているのですから、そのことを口にしたら、かえって命が危なくなる状況がありました。ところが彼らは、行く先々でみことばを宣べて歩いたというのです。この結果、福音宣教は思わぬ展開を見せることになります。イエス様は使徒の働き1章8節で「聖霊があなたがたの上に臨まれるとき、あなたがたは力を受けます。そして、エルサレム、ユダヤとサマリヤの全土、および地の果てにまで、わたしの証人となります。」と言われましたが、「ユダヤとサマリヤの全土に」という世界宣教における第二段階が導かれることとなったのです。

ここで注目すべきは、この新しい宣教の拡がりの担い手になったのは誰かということです。それは一般の信者たちでした。使徒たちではありません。使徒たちはこの時、エルサレムにいました。この新しい段階において、最前線にいたのは普通の信徒たちだったのです。彼らによって、これまでの殻を打ち破る大躍進が遂げられて行ったのです。信徒のパワーがいかに大きく、重要かをこのことは暗示しています。使徒たちによっては成し遂げられて来なかった新しい局面が、専門の訓練を受けたわけではない普通の信者たちによって切り開かれて行ったのです。

それにしてもどうして彼らは行く先々でみことばを宣べながら巡り歩いたのでしょうか。彼らは出発前に使徒たち、あるいは教会から、そのように命令されたわけではありません。迫害は突然起こったのであり、彼らは十分な身支度もできないまま、チリヂリバラバラに散らされました。ですから伝道を強制されることはありませんでしたし、みことばを語るのを控えようと思えば、いつでもそうできたのです。ところが彼らは行く先々でみことばを宣べながら巡り歩きました。彼らがそうした一つのきっかけは、出て行った先で、なぜあなたがたはここにやって来たのですかと問われたということがあったでしょう。ただの旅行とは違って、難民状態で逃げて来た人たちに、町の人々は尋ねたことでしょうか。しかしそうだとしても、黙っていることは可能です。あるいは必要最小限しか話さないことも可能です。ところが彼らは語りながら歩いたのです。それはキリストによって与えられた救いの喜びを黙っているということなど彼らにはできなかつたからでしょう。Ⅱコリント5章14節：「というのは、キリストの愛が私たちを取り囲んでいるからです。」口語訳：「なぜなら、キリストの愛がわたしたちに強く迫っているからである。」新共同訳：「なぜなら、キリストの愛がわたしたちを駆り立てているからです。」キリストが彼ら一人一人の心を満たしてくださっていたので、彼らはそれについて何も語らず、内に閉じ込めておくことなどできなかつたのです。後の11章19節を見ると、「さて、ステパノのことから起こった迫害によって散らされた人々は、フェニキヤ、キプロス、アンテオケまでも進んで行った」とありますから、彼らはさらに遠い地域にまでも進んで行ったことが分かります。このような彼らを用いて、主は世界宣教の次の段階を導かれたのです。

そんな彼らの働きの具体的な一例として、5節からピリポによるサマリヤ伝道の様子が記されています。彼はステパノと同じく、あの7人の一人として会衆の中から選ばれた人です。彼はサマリヤの町に下って行って、そこでキリストを伝えます。ヨハネの福音書4章のサマリヤ

の女の記事に記されていますように、当時ユダヤ人はサマリヤ人と付き合いをしませんでした。サマリヤ人はアッシリヤ捕囚後、外国人と共に住んだため、人種的にも、宗教的にも混血民族になったと南のユダヤ人から軽蔑されるようになりました。そしてエルサレム神殿に関わることを拒否されたサマリヤ人は、自分たちの領土内のゲリジム山に独自の神殿を建てた結果、両者の亀裂は決定的なものとなってしまいました。それ以来、民族的な反感感情は何百年にも渡って続いていたのです。そんなサマリヤ人に何かを語っても何の意味があるだろうか。そのようにピリポが思って、口をつぐんでいたとしてもおかしくありません。

ところが彼がキリストを宣べ伝えたところ、サマリヤで大リバイバルが生じます。人々はピリポの話を聞き、その行なっているしるしを見ました。このしるしは、具体的には7節に記されている様々な奇跡を指します。ここに神の国の福音の何であるかが示されています。イエス・キリストの福音は、私たちと神との関係を回復させるものです。罪の赦しを経て、神が私たちにご計画された本来の祝福が取り戻されて行くようになります。ですから7節にあるように、汚れた霊に支配されていた人たちはその霊から解放され、また病の下にあった人々が、その病から癒されて行きました。このような祝福は究極的にはやがての天国において完全に実現しますが、その神の国のリアリティーを指し示すため、そして福音のメッセージをバックアップするため、まだ聖書が完結していなかった当時、このような奇跡がセットで行なわれたのです。この神の国の祝福に触れて、サマリヤの町には大きな喜びが起こった、と8節にあります。あのサマリヤの町にも神の国は広がったのです。

その影響力の大きさが9節以降に記されています。そこに魔術師シモンが出て来ます。福音がこの町に入るまで、サマリヤの町は魔術師シモンの力の下にあり、人々は彼に関心を抱き、彼に従う生活をしていました。ところがピリポのメッセージに触れて、人々はみなそちらに従うようになりました。男も女もバプテスマを受け、ついにはシモン自身も信じてバプテスマを受けられる状態となりました。彼も慌ててそうせざるをえないほど、この町丸ごとが一気にキリストとその福音へ導かれて行ったのです。それで次回、エルサレムから使徒たちがやって来て、この状態を確認し、主の不思議な導きを確かめるということになるわけです。

以上の箇所も今日の私たちに大切なメッセージを語っていると思います。二つのことを最後にまとめとして申し上げたいと思います。一つ目は、困難な状況が生じたからと言って、それで希望を捨ててしまってはならないということです。教会にとって、8章1~3節に記された状況ほど絶望的な状況は他にあるのでしょうか。しかしそこから誰も思ってもみなかったような新しい展開が導かれました。ですから私たちもどんな状況に至っても、人間の考えで希望を失ってしまってはならないと教えられます。神は最悪の状況からも益を取り出すことができます。死の状態から、いのちを取り出すことができます。十字架に続いて復活を導くことができます。私たちが目の前にするガッカリするようなことから、神がどんなに素晴らしい導きを取り出してくださるかは誰にも分かりません。すべてを働かせて益としてくださる神が、すべての上にあってご支配くださっていることを私たちは常に仰ぎ、希望の目を上げたいと思います。

もう一つのこと、神はそのみわざのために普通の信者を用いられるということです。こんな私に何ができるだろうかと思われるような私、弱くて力のない私、ひととき困難な状態に置

かれている私をも用いてくださる。4節に「散らされた人たちは」とありました。彼らは迫害によって各地に散らされましたが、ある意味で私たち一人一人も散らされている者たちと言えます。それぞれ社会の中に、地域の中に、職場の中に、学校の中に散らされています。私たちはそこで自分は少数者であり、弱く、無力な者のように思います。心細く、何の働きもできないように思います。しかし神は、散らされた人たちを用いてさらなる宣教の前進を導いて行かれました。

ですから私たちはどんな状況が目の前にあっても、この状況だからもうだめだとか、こんな状況では宣教などできるものではない、などと考えないようにしたい。どんな状況においても、主は一人一人を用いて、私たちの思いを越えた新しい導きをくださることが出来ます。私たちはその恵みに富みたもう主を仰いで心を強くし、まずは自らが福音に生きることにしっかり歩みたいと思います。私たちは救いを頂いた者たちとして、世の人々に分かち合うことができるものを持たされている者たちです。その福音に日々しっかり歩み、散らされた場所で福音を宣べ伝えることを祈り求めて歩みたい。そうする時に神は、私たちを用いて、まさかと思われるような祝福を取り出し、導いてくださいます。そして私たちは福音のために共に働くようにとの神の招きに応答し、またそのために用いていただける特権と喜びに歩むように導かれるのです。